

日本共産党 和歌山市会議員

ひめだ高宏ニュース

NO.1222

18.10.23

藤井聡太7段 新人王戦優勝

将棋の藤井聡太7段が「しんぶん赤旗」主催の新人王戦で、これまでの最年少記録を更新し初優勝。新人王戦の出場資格は、10月1日時点で26歳。6段以下のため次回から出場できません。気が早い話ですが、「このまま元気に指し続けたい。再生世の冠に続き、永世の冠の誕生が見られるかも...」

県民のくらしをまもり、

憲法がいきる県政に変えよう

県政に問われる4つの争点
1. 9条改憲・戦争する国
2. カジノ
3. 自然・文化を大切に
4. 観光振興

仁坂知事は、戦争法、共謀罪法に対し、国会審議など、選挙やウソが明らかになった政府説明をこのまみり用いて、この法の選挙法を廃止してまもりました。

フリーの人々



<1005>

増し中央省庁
不正 3700人
障害者雇用促進法
第三号
原簿
原簿
原簿

うかがい
いちばん
99いんだて

うかがい
この際
名前を
うへッ!

たぶんこの程度ヤリ
ナメナヨ!

戦争法案に対して「政府は、安全保障に係る現在の体制が十分でないという問題意識に基づき、法整備を図る」としておられます。国民の反対の声に「防衛や安全保障や自衛権のあり方などの議論を嫌悪する」といふことは早知は守れない。そして「戦争法案」とあるのは「徴兵制になる」といふレベル貼りをすることにと終始してはどうかと思ひし。

2. カジノはいりません。安心して住める街づくりと自然・文化を大切に。観光振興をはかります。知事は「ギャンブル依存症などの問題は法と県の規

制で対応できる」として当初の「外国人専用」の条件をあっさり変更、「国内3カ所に入るよう全力」とマリーナシティに誘致する。和歌山県エスエヌホールを「

今週のフリーの人々

(その168)

「責任者出てこい！」
人生幸福・住恵幸子の夫婦漫才を思い出しました。「まあみなさん聞いてください」と世相を切り取りボヤキ漫才で、幸朗さんが「責任者出てこい！」と叫ぶと幸子さん「出てきたらどうないすんのん」と突っ込み「謝ったらいいや」と。
中央省庁が障害者雇用を3700人も水増ししてました。財務省は障害者雇用促進法ができた

作成。今年度も7千万円を予算化して、カジノ事業者からの事業案を募集するとしています。ギャンブル施設を安心してくらしさせる施策はありませぬ。

1960年から不正をしてきたことなのです。ウソや不正は誰がやっても悪いわけですが、民間企業は不正が明らかになることかまざる責任者が出てきて説明したり謝ったりします。一方、国の不正は、森友学園への国有地の億圓引きでも誰も謝罪もないう責任も取りません。今回の水増しも雇用を増やせばそれで済むみたいは思っています。国民をバカにするな。



ひめだ高宏

3. 病院ベッド数削減の地域医療構想など、国にいなりに社会保障削減をすすめる県政もかえ、県民のいのちをまもるために独自の社会保障の実をほめる県政入

国にいなりに県は「地域医療構想」を策定し、全体の2割にあたる26000床のベッド数を削減を計画、推進。介護保険料は「1割」23市町村で値上げされ、県平均標準額を全国で4番め

いんぎょあすた

松坂みち子

始まりました

大好きなフィギュアスケートのシーズンです。何といっても羽生結弦選手。ケガから復帰の初戦は失敗もありましたが

の高けです。県単一化された国保は、県が市町村の一般会計からの繰り入れを廃止し、統一保険料をめざす方針を決めました。県独自の福祉施策の実現が必弊。

4. 県民のくらしにきりこい、くらしを支える県政を
県内の非正規雇用の割合は、07年35.5%から17年39.3%に上昇しています。貧困率は増えています。農林水産業の従事者は

これから大会ごとに完成度が上がっていくでしょう。宮原知子選手の演技はさらにきれいだし、現役復帰した高橋大輔選手のステップも変わりず魅力的。宇野昌磨選手、坂本香織選手も素敵。本田真凛選手は妹がデビューに出ているため特別に注目されてプレッシャーがかかっているようです。

80年の半分以上に減っています。小規模事業者の割合が全国一高く、第3次産業の平均規模が全国一小さい県です。

今、求められているのは、企業の呼び込みや競争力強化ではなく、地域の人を大切に、地域に根ざした産業を育て伸ばす振興策第一の発想・循環型の地域振興策へ転換することです。【ゆたかで住みよい和歌山県をつくる会】



松坂みち子 (県議予定候補)

憧れのフィギュアスケート。したくてもできなかった分、応援したい。演技の裏付けとなっっている選手たちの日々の努力に思いを寄せ、元氣と勇気をもっています。

潮流

「青春の意気があふ水でいた」。当時の本紙をみると、観戦記記者の興奮した様子が伝わってきます。なにか

「オレたちの棋戦」という意気込みがあったと

1969年10月に始まった将棋の新人王戦。「赤旗」は伝統文化である将棋にいち早く注目、その後も日曜版で紙面を割いてきました。そして日刊の新企画とあわせ、日本将棋連盟の協力をもって新たな棋戦をつくったのです。若手だけでなく、アマチュアや女流棋士にも道を開いてきた新人王戦も来年で50期の節目を迎えます。羽生善治・永世七冠や佐藤天彦名人らがつもつた顔ぶれが歴代優勝者に並び、一流棋士への登竜門として定着してきました。数々の棋士の励みとなってきた棋戦に、藤井聡太さんが新たなページを刻み

ました。最年少記録をぬかえる16歳2カ月でタイトルを獲得。初体験となった「三番勝負」にも実力ある相手にスティーブ勝つ。「これを機にさらけ出す準備をしよう」がうばっていきなさいと書きこまれた。「と書きこまれた」中学生プロデビューからの快進撃は周知の通り。今年も朝日杯でトップ棋士の次々と破る優勝し、あつという間に「段々」駆け上っています。いくつもの最年少記録を刷新しながら、「田」の前の一局に全力を尽くすだけです」と謙虚な姿勢に変わりはありません。「優勝という形で卒業できようらしい」と藤井さん。新人王戦をステップに大勢の棋士が羽ばたいていったように、これから将棋界の歴史を書き換える壮大な活躍を期待したい。

赤旗 日刊新3.40702E 日曜版 80201E